第１章

危機1

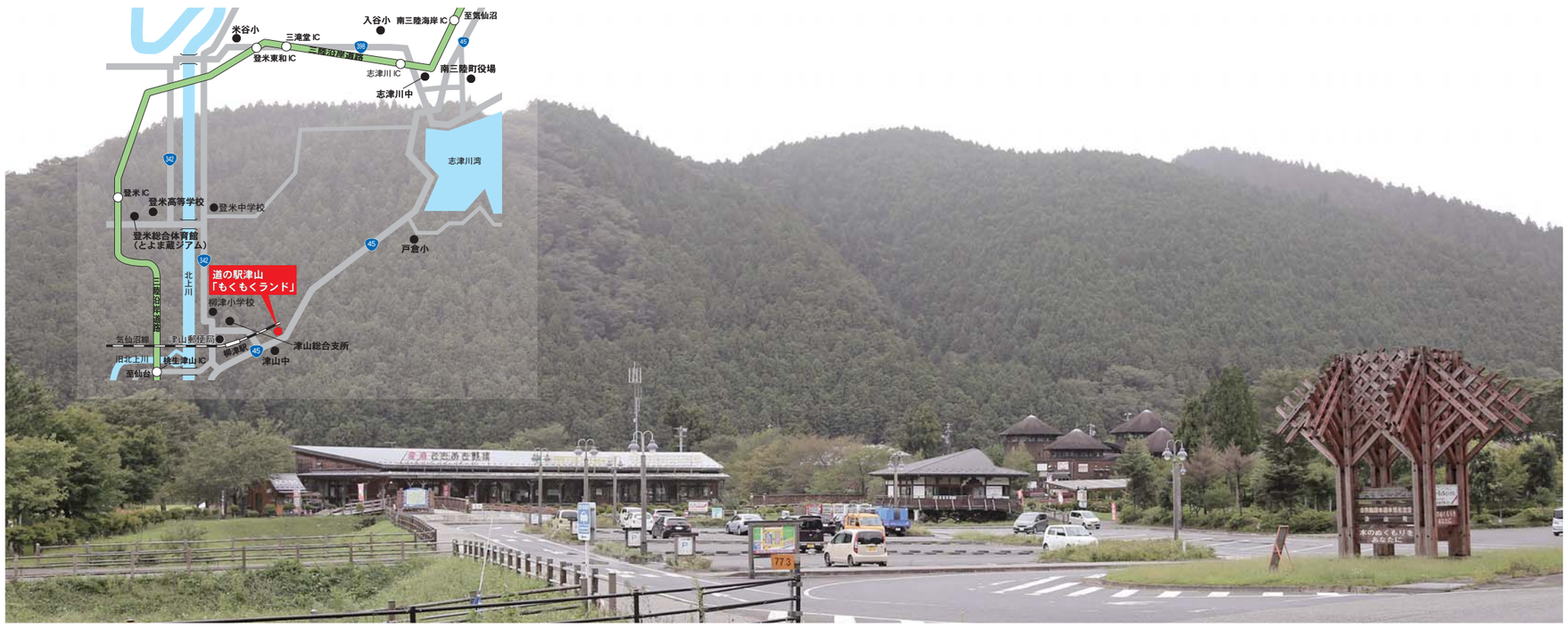
売上額減少と後継者不足

三陸道の延伸に伴う入込数と売上額の減少や木工芸品を作る木工職人の後継者不足はどのような状況なのでしょうか。

5年で売上半減。職人の平均年齢は約70歳

産業経済部
地域ビジネス支援課
櫻田 俊介（しゅんすけ）主査

■道の駅津山「もくもくランド」周辺地図



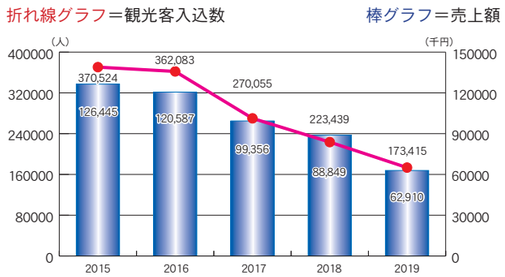
通過交通量が減り売り上げ減少

道の駅津山「もくもくランド」の観光客入込数と売上額は、ここ数年減少しており、厳しい状況が続いています。その大きな要因は、三陸沿岸道路（三陸道）の延伸によって通過交通量が激減したことです。

三陸道は東日本大震災からの復興道路に位置付けられ、宮城と青森を結ぶ自動車専用道路として、今も整備が進められています。三陸道の整備前までは、仙台方面から沿岸部の南三陸方面に向かうためには国道45号線を通るルートが一般的でした。その途中にあるもくもくランドは、中継地として大型バスなどが停車し、買い物や休憩に利用されていました。

それが、仙台方面から本市を通り、沿岸部の南三陸、気仙沼方面に整備が進むにつれ、国道45号線を通らず、直接南三陸方面へ行けるようになりました。

■入込数、売上額推移



このような要因から、もくもくランドの通過交通量が減り、それに比例して観光客入込数と売上額も減っているのが現状です。

２０１５年度に37万人だったもくもくランドの観光客入込数は、19年度には半分以下の17万人にまで落ち込んでいます。観光客入込数の減少に伴い、15年度に１億２千万円ほどあった売上額も、19年度には６２００万円ほどと約50％も減少しています。

新型コロナで厳しい状況に拍車

さらに、昨年の台風被害、そして昨今の新型コロナウイルス感染症の影響で、厳しい状況により拍車がかかっています。木工芸品の展示販売については、今まで営業していたもくもくハウスが台風で被災し使用できなくなったため、隣の物産館内で仮営業の状態が続いています。以前のように広いスペースで販売ができないため、大型の家具などを展示することが難しいことも売上額減少の一因になっています。

新型コロナウイルス感染症による影響を大きく受けた本年度上半期の売上額は２６００万円ほど。月ごとの集計も、入込数、売上額ともに、全ての月で前年度よりも減少しています。新型コロナウイルス感染症の収束のめどが立っておらず、今後も厳しい状況が予想されます。

職人の後継者確保・育成が課題

そして、もくもくランドの「顔」である木工芸品を製作する木工職人の後継者不足も深刻化しています。

木工職人は、かつて20人以上いた時もありましたが、現在、津山木工芸品事業協同組合に所属する職人は７人。さらに、高齢化も進んでおり、最高齢の職人は72歳。一番若い人でも63歳、平均年齢も69歳という状況です。

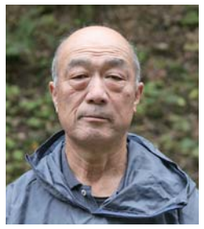
これからどのように、木工職人の後継者を確保・育成していくかが大きな課題になっています。

売上激減で存続に危機感

津山産直事業協同組合
阿部 隆吉（たかよし）理事長

無人販売から始まった産直は、販売開始から35年以上たちますが、三陸道が延伸するたびに車の流れが変わり、売上が激減しています。出荷してくれる地元の農家や買いに来てくれる人たちのためにも営業を続けたいのですが、組合員の高齢化などもあり、存続に危機感を持っています。

木工職人志す若者いない



津山木工芸品事業協同組合
佐々木 正志（まさし）さん

かつて20人以上いた組合の木工職人も、今では７人になってしまいました。木工職人には、流れ作業で部品を作るのではなく、手間暇かけて一つの良い商品を作り上げることが求められます。血のつながりだけが後継者ではないのですが、地元を含め木工職人を志す若者がいないのが現実です。

台風とコロナ禍で客足減

食事処 木里口（きりぐち）
西城 照江（てるえ）さん

三陸道が南三陸町に伸びるとともに客足が減っています。さらに昨年の台風で被災し、約30年続いた店舗の移転を余儀なくされました。仮オープンを経て客足が戻りつつあったところに、今度は新型コロナ。それでも観光客や地域の人が集う場所として、ここから活性化できないか考えています。